

# 『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

## 平和

平成28年11月第2週放送

十一月十一日は、「世界平和記念日」でした。

戦後七十年余り、この国で当たり前のように平和を<sup>きょうじゆ</sup>享受してきた私たちですが、世界を見渡せば、この間銃声の鳴り響かなかった年は一年たりともありませんでした。哲学者カントは、“人間にとっての自然状態とは戦争状態であって、平和な状態とは常に努力して作り上げていくものだ”と言っていますから、現在の日本の平和な姿は、戦中戦後に関わってきた多くの人々の努力の賜物であったと言えます。

「平和」を考えるうえで、二千五百年余り前に仏教を開かれたお釈迦さまには悲しい原体験があります。お釈迦さまがお生まれになったシャカ族の国は、東西をマガタ国とコーサラ国という大<sup>たいこく</sup>国に囲まれた小さな王国でした。時に自<sup>じこく</sup>国を守るため政略結婚を余儀なくされることもあり、西のコーサラ国の若き国王であったビルリ王は、シャカ族が王家の娘だと偽<sup>いつわ</sup>って送り出した召<sup>めしつか</sup>使いの娘が産んだ子であったと伝えられています。身分や階級意識が強かった時代、自らの出<sup>しゅつしよう</sup>生の秘密を知ったビルリ王は、シャカ族の国に復讐すべく進軍を開始します。それを聞きつけたお釈迦さまは、その進軍をくい止めるべく三度説<sup>みたび</sup>得に当たりますが、四度目にはシャカ族が行った行為の結果であるとして、ビルリ王の進軍を見送ったといひます。「仏の顔も三度まで」と言われる元となった逸話です。

この逸話を<sup>かえり</sup>顧みる時、仏教の教えの中にお釈迦さまの「平和」への思いが垣間見えてきます。

仏教でいう苦しみの一つに、憎<sup>にく</sup>らしい相手と対面することを述べた「怨<sup>おんぞう</sup>憎<sup>えく</sup>会<sup>く</sup>苦」があります。人である以上、嫌いな相手や憎らしい相手は誰にでもいます。しかし解決のために相手に危害を加えたり、自分を傷つけたりするという手段を取らないという誓いである「不<sup>ふ</sup>殺<sup>せつ</sup>生<sup>しょう</sup>戒<sup>かい</sup>」が存在します。

仏教は、まず相手と争<sup>あらそ</sup>わないことを自らの前提とすることから始めます。自らの内なる戒<sup>いまし</sup>め、誓いという形で昇<sup>しょう</sup>華<sup>か</sup>させるのです。言うなれば「反<sup>はん</sup>戦<sup>せん</sup>」ではなく「非<sup>ひ</sup>戦<sup>せん</sup>」という誓いです。自らの内に宿る憎しみや怒り、暴力性などを見つめることを求めます。

その見つめた先に<sup>あらわ</sup>現れるもの。それが、私たちが相手に見出す仏の心への敬意です。その敬意は、両手を合わせる“合掌”や“礼<sup>らい</sup>拜<sup>はい</sup>”という身体的行為へとつ

## 『 禅のころろ - 曹洞宗 - 』

ながっていくのです。

「平和」を考える時、まず我が内なる心に宿るプラスとマイナスの感情に、心静かに向き合う姿勢から始めてみてはいかがでしょうか。

— 終 —